

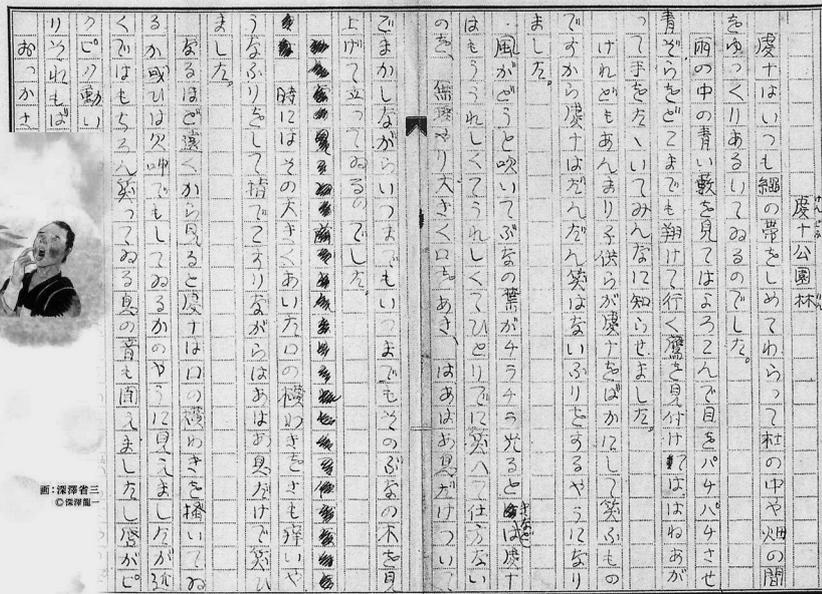
# 宮沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36

宮沢賢治記念館

☎ (0198) 31-2319  
📠 (0198) 31-2320

## 特別展「賢治と樹木」



童話「虔十公園林」

## 「雨を喜び、風を楽しむ」

木村直弘



この拙文を今まさに目にされている皆さまの中には、上掲の表題について、「雨ニモマケズ」冒頭のパロディ？と思われた方もいらっしゃるかもしれません。実はこの言葉、1951年、のちに球界のヒーローとなる15歳の長嶋茂雄さん（以下ミスターと略記）が、中学卒業時の「寄せ書き」に記したものです。

この言葉を所謂「長嶋語録」の嚆矢とした深澤弘さん（『長嶋イズム』、2004年）は、ミスターがプロ野球界デビュー後もこの言葉について度々言及していることを、講演やTVの特番等で繰り返し紹介しています。それらにはいろいろなヴァリエーションがあるようですが、この言葉は、基本的には、雨や風に象徴される試練はいわばあって当然のもので、それをネガティブに捉えるのは無意味であり、そうした試練があるからこそ自分が成長

できる、「雨もまたよし、風もまたよし」「雨よ降ってきてくれてありがとう、風よ吹いてくれてありがとう」とプラスに捉えることこそが人生にとっては重要であるという、ミスター特有の超ポジティブ思考を示す典型例とされます。

そもそも「雨ニモマケズ」が中学校の国語教科書に掲載されるのは、1947年2月、文部省発行の『中等国語 一 (1)』を嚆矢とします（ミスターが中学に入学したのは1948年4月ですので、当時この教科書で学んだ可能性大です）。その後多くの中学校国語教科書に採択された賢治関連教材に関して、中地文さんは「詩「[雨ニモマケズ]」を通して偉人賢治を描き、それを模範として提示しようとする傾向が強いこと」（共著『修羅はよみがえった』、2007年、97頁）を指摘していますが、ミスターは、そうした教科書的教育目標に染まることなく、この詩の冒頭を自分なりに解釈し受容したと言えるでしょう。

興味深いのは、高橋世織さんが、賢治作品を読むにあたっては、〈耳人間〉になること、すなわち「聴く行為に限らず諸感覚を統合し（…）まる

ごとの身体性を立ち上がらせ、復権していこうとする行為」(『感覚のモダン』、2003年、10頁)が要請される、と提言していることです。ミスター独特の練習、すなわち敢えて部屋を真っ暗にし、只管バットが空気を切る音にだけ集中して素振りを繰り返すその姿は、まさにこの〈耳人間〉のイメージに重なりますし、「雨を喜び、風を楽しむ」ミスターに、雨や風の中であって「まるごとの身体性を立ち上がらせ」ているイメージを看取するのは、愚生だけでしょうか。

さて、ミスターにも影響を与えたこの「雨ニモマケズ」は、そうした各人各様の解釈を誘発するという意味で、単なるメモを超えて詩の機能を十分有していますし、実際海外で翻訳される際も詩として紹介されていることは言を俟ちません。そこで、ここでは、同じ漢字文化圏である中国語圏での翻訳例を少しご紹介してみましよう(以下、簡体字・繁体字とも日本語で表記)。

まず、上掲・中地論文からの引用中「〔雨ニモマケズ〕」と表記されていたように、この詩には表題がないため、通常本文冒頭1行目を表題の代わりとしています。しかし、これが詩として翻訳される場合、必ずしもそうとは限りません。たとえば、この詩の中国語初訳は、1930年代、魯迅の友人である錢韜孫によるものとされ、表題は①《不怕風雨》とつけられたようです。ここでは、本文冒頭2行が(「風雨ニマケズ」と)圧縮されていることに注意しましょう。中国での訳書や論文・随筆におけるこのタイプの主な表題翻訳例としては、②《風雨無阻》(成語としては「どんな状況でも予定どおり行なう」の意)、③《不惧風雨》、④《不畏風雨》、⑤《無畏風雨》、⑥《不輸給風雨》(輸給は?に負けるの意)、⑦《無懼風雨》などが挙げられます。他にも、日本での通称に従い、冒頭行だけを訳した⑧《不輸給雨》、⑨《雨打、不怕》や、あるいは⑩《不畏狂風暴雨》と意識したものなどもあります。

では、こうした表題の下、本文冒頭2行はどのように訳されているのでしょうか。たとえば直訳パターンであれば、①「不怕雨／不怕風」(／は改行の意)、④「不畏雨／不畏風」、⑥「不輸給雨／不輸給風」、⑦「無懼雨／無懼風」となります。他にも、③や④のように、本文が表題と異なりそれぞれ「惧」や「畏」を使わず「不怕雨／不怕風」となっているもの、⑦「無懼雨、無懼風」のよう

に改行していないもの、⑨のように、表題は《雨打、不怕》とされているのに本文は「風吹、不怕、／雨打、不怕」と順番を入れ替えて表記されているもの、⑩「不畏暴雨、不畏狂風。」のように4字＋4字を1行として定型詩的(各行の最後にできるだけ-ng音の漢字を配置し、原詩と同じ全30行)に全文を整えているもの等々、実際は多種多様です(ちなみに、日本でも著名な王敏さんの場合、2007年出版の訳書では、表題は②で、本文も「不畏風雨」と1行圧縮パターンですが、2012年の論文中では、「不惧驟雨、／不畏狂風。」と意識されています)。このように、中国語訳では、漢詩の伝統と表語文字である漢字の特性を活かして、多様な訳出がなされています。

そもそも、賢治作品の大きな特徴は、国内外、老若男女を問わず、多種多様な視点からのアプローチを許容し、さらにそれら己が賢治論が様々な形で広く世に発信され続けているところにあります。その中に持論に合わない考えがあったとしても、それを「排除」することなくミスターのようにポジティブに捉え、そうした賢治作品解釈・受容の「ダイバーシティ」を喜び、楽しみたいものです。

## イーハトーブの土地利用

森本智子



「こゝへ畑起してもいいかあ。」  
「いゝぞお。」森が一斉にこたへました。

みんなは又叫びました。

「こゝに家建ててもいいかあ。」

「ようし。」森は一ぺんにこたへました。

「狼森と策森、盗森」における、森(自然)と人のやりとりが好きだ。人にとっても森にとっても生死をめぐる攻防であるはずなのに、なんてのびやかな雰囲気や漂わせていることか。「こゝ」は、人がやってくるずっとずっと前から存在していた森のもの。だからこそ、人は許しを得つつ、「こゝ」を切り拓いて住まいの場を確保していく。

だが、こうした人と自然の直接のコミュニケーションは、近代を舞台とする作品ではぐっと減っ

てしまう。都市化が進み、自然の声に耳を傾ける機会が人々から奪われてしまうためであろう。そこで、「虹や月あかり」から物語をもらってきて人々に届ける、「わたくし」という語り手が必要になる。また、「風がどうと吹いておなの葉がチラチラ光る」のが嬉しくてたまらないような、自然と交感する人物が人と自然の媒介となる。「虔十公園林」の主人公・虔十のように。

虔十は、子どもたちからすら「少し足りない」と思われていた青年であるが、自然の声に導かれるように、樹木が育たない土地に杉の苗を植え、子どもたちが遊ぶ林へと変容させた。その林が「公園」となった経緯を見ておこう。

次の年その村に鉄道が通り虔十の家から三町ばかり東の方に停車場ができました。あちこちに大きな瀬戸物の工場や製糸場ができました。そこらの畑や田はずんずん潰れて家がたちました。いつかすっかり町になってしまったのです。その中に虔十の林だけはどう云ふわけかそのまま残って居りました。その杉もやっと一丈ぐらゐ、子供らは毎日毎日集まりました。

「次の年」は、虔十が死去した翌年を指している。都市化が急激に進むなか、虔十の林だけがフォレスト・アイランドとして残り続けている様子が、端的に描かれる。やがて二十年の歳月が過ぎ、かつて杉林で遊んだ子ども—今は、アメリカの大学で教鞭を執る博士—が久しぶりに帰郷する。彼は、時代の波を受けて変化してしまった故郷の風景の中に、子どもの頃のまま残る杉林と再会して感動を口にする。

「こゝはもういつまでも子供たちの美しい公園地です。どうでせう。こゝに虔十公園林と名をつけていつまでもこの通り保存するやうにしては。」

こうして虔十の林は、博士の発案により、近代的な「公園」へと生まれ変わる。ちなみに、都市化されても杉林が「そのまま残って」いたのは、そこが虔十の家の所有地だったからである。その土地が「公共」のものとなることで、保護される(永遠性が保たれうる)形となる。林から公園へ。ここでは私的空間(個人の所有地)から公的空間(オープンスペース)への切り替えが行われている。それも、「この公園林の杉の黒い立派な緑、さはやかな匂、夏のすゞしい陰、月光色の芝生が

これから何千人の人たちに本当のさいはひが何だかを教へるか数へられませんでした」とあるとおり、虔十が自然から受け取ったメッセージを宿したままで。

この童話に描かれたように、イノセントな人物と、教養を身につけた知識人の双方が、人と自然を媒介するべく共存しているのは、賢治の文学ならではの特徴だろう。人と自然の原初の関係性と、ブッキッシュな(書物に頼ったような)知が手を携え合うことで成り立つ、イーハトーブの土地利用。賢治作品における「公的意識」(パブリック・マインド)のあり方は、こうした都市空間へのまなざし、土地利用への見識などの裏打ちがあってこそ、説得力を持ちうるのだと思う。

## 宮沢賢治と大迫 一風之又三郎と南部葉一

浅沼利一郎



大迫町を一言で言うなら、小さな町。江戸時代以降は、遠野街道の宿場町として栄えていたぐらいしか言えませんが、今では早池峰山と、2009年にユネスコの無形文化遺産に登録された早池峰神楽、そしてワインの里として有名になり、小さいながら味わいのある町になっています。

大迫の歴史はとても古く、各地に縄文人の遺跡が多数残っています。大迫の縄文人は装飾品を身に着けていたようで、生活水準や文化の高さを伝えてくれます。これらの装飾品は早池峰山の恩恵を受けていたことによるもので、たくさんの鉱物が採れたのでしょう。このあたりは、早池峰山が隆起してからは一度も海に沈んでいない地域ですから、大迫全体がジオパークのような場所なのです。そして、江戸時代前後の大迫は、まさにゴールドラッシュ。大迫には48か所の金山があり、日本全国からさまざまな人たちが集まり、今でも精錬所の跡や、南部藩がお金を作っていた銭座の跡などがのこっています。また、金山が人里から離れていたため、キリシタンの方々も多くいたという逸話もあります。大迫の金は砂金だったことから、ざるを置いておけば砂金が入ったという小さな滝もあります。このざるにたまった砂金はだれの権利でもなかったので、早く来てざるを取替え

た人が勝ちだったそうです。そして、大迫ではゴールドラッシュに並んでタバコの耕作が盛んになり、昭和の大恐慌まで隆盛を極めた生糸産業もあります。このような時代の変革を経て今の大迫があるのです。

宮沢賢治さんは大迫と縁が深く、大正7年5月に行われた稗貫郡土壌調査をきっかけに、大迫を訪れています。賢治さんは最初に来た時から、この土地のすばらしい風土に、そして文化の高さにおどろきます。このころの大迫は、まさにたばこ南部葉の耕作で盛り上がっていた時代でした。賢治さんが土壌調査のため外川目地区の合石集落を訪れた際に、タバコの耕作に関して質問をしていたのを同地の古老が覚えています。「当時、ハイカラな人がやってきて、タバコのことをあれこれきかれた。不思議な思い出として印象深い」と回想していました。

大正7年9月に行われた土壌調査の時に賢治さんが詠んだ歌稿が12首あります。それらは「折壁」と題され、なかにはこのような一首があります。

たばこばた 風ふけばくらし

たばこばた 光の針がそそげばかなし

この歌にはタバコ農家の暮らしが詠まれています。たばこ畑に風がふけば、葉が擦られて痛むことから、暮らしが大変に（暗く）なる。また、光の針がそそげばかなしは、葉に細かい穴があいてしまうと（葉を通して細い光が地面に注がれるようになる）売り物にならなくなることから、生活がなりたたない（悲しくなる）という解釈になるのかな。この南部葉は葉巻用のタバコだったので葉に穴が開くとキザミ煙草になるからお金にならなかったのです。折壁とは、大迫の北東に位置する内川目地区の集落の名前で、このあたりは古くから南部葉タバコの産地として有名な場所です。

た。この折壁の歌をとっても気に入っていた人に、浅沼良蔵さんという方がいました。「南部たばこ耕作組合」の組合長さんでもあったこの方が、大迫の街中に「南部たばこ資料館」を建てた時に、入口にこの歌を掲げました。賢治さんの教え子でもあって賢治さんを敬愛していました。賢治さんが農学校教師時代に「飢餓陣営」という演劇を自作し、生徒たちにやらせたそうですが、その主人公である「バナナン大将」の役をやったのが良蔵さんだったそうです。大迫のタバコ耕作の特長が書かれたのが「風の又三郎」です。早池峰と大迫を歩いた賢治さんだからこそ描くことができた風景が風の又三郎にはたくさん詰まっているのです。風の又三郎に出てくる子供達の会話は、農家のじい様、ばあ様達がタバコの葉一枚一枚に命をかけており、普段ひとり言のようにつぶやいている言葉が、子供達の身体にも染まって出てきたものともいえるのです。「タバコの葉は一枚一枚専売局で帳面につけている」みたいな言葉。タバコ耕作者の方たちは、ただの葉一枚も無駄にできなかったのです。それがあの場面の中で、三郎少年との会話に出てくるのです。また、風の又三郎の終わりではじい様が「ああひで風だ。今日はたばこも粟もすっかりやらえる。」とつぶやく場面、これもタバコ農家の複雑な心境が上手く表現されています。賢治さんが羅須地人協会教材として用いた教材用絵図の一枚に南部葉が描かれています。

大迫には賢治さんに影響を与えたものがたくさんあります。もし南部葉耕作がなければ、今の大迫はないといっても過言ではありません。そして、賢治さんについてのエピソードも生まれることもありませんでした。

読者の広場

私の宮沢賢治

よみがえった100年前の作品情景

栗石と宮沢賢治を語る会 関 敬一

当会には創立以来23年間毎年続けている行事が2つある。その1つは、町内の小中学生を対象に

した「宮沢賢治作品読書感想文コンクール」であり、もう一つは真夜中に20キロを歩く賢治追体験行事「秋田街道青春夜行」である。読書感想文コンクールの入賞者数はこれまでに延べ534名に上り、青春夜行の参加者は延べ506名を数える。

ことし2017年は第23回の秋田街道青春夜行を7

月7日(金)から8日(土)にかけて行った。今回は盛岡・雫石から12名、東京から1名の計13名が参加した。

この行事は今からちょうど100年前の1917(大正6)年7月7日、七夕の夜に宮沢賢治ら盛岡高等農林学校の短歌仲間4人が実際に盛岡と雫石の春木場との間約20キロを夜通し歩いたことに由来する。その時の様子を賢治さんが短編作品「秋田街道」に描いていることから、これを追体験しようと23年前に始めたものだ。第2回以降、参加者の利便を考え実施日は7月7日に最も近い金曜日の深夜から土曜日の早朝にかけて実施している。しかし、過去22回の実績の中で7月7日に行えたのは初回を含めて3回しかない。ところが賢治さんたちが歩いた年からちょうど100年目の今年が7月7日がまさに金曜日に当たったのだ。賢治さんには何ごとにも何か因縁めいた不思議さがついて回るというイメージがあるが、じつは今年の青春夜行もそうだったのである。

7月7日真夜中に盛岡市の夕顔瀬橋に参加者が集合。8日午前零時15分に歩き始めた一行は作品「秋田街道」の描写と同じく崇高な月光のなか>雫石に向けて歩を進めた。確かな記録はないが過去22回の中でも“崇高”という表現が似合う月夜は初めてかもしれない。午前1時ごろ一行が雫石川堤防沿いの荒川という水路にさしかかる。「秋田街道」の文中で「…道が小さな橋にかゝる。螢がプイと飛んで行く。」とあるあたりだ。実際、過去に1度だけここでホテルを見かけている。この日はなかなかホテルに遭遇しない。水路が終わりかけるころ同行者の女性が「アッ、ホテルだ!」と声を上げた。なんと川べりの草むらで数匹のホテルが群れて明滅していたのである。これはもう“奇跡”に近いことだ。さらに明け方4時過ぎ、賢治さんが愛した七ツ森のふもとでは作品にある「月見草の花がほのかな夢をたゞよはし…」の表現を思わせるように咲く月見草(オオマツヨイグサ)に出合った。これは何ということだろう。賢治さん流に言えば「こんなことは実に稀です。」の表現しか思いつかない。

花巻農学校教師時代から演劇上演が好きだった賢治さん。きっと100年目を記念して陰で今回の青春夜行の舞台回しを務めてくれたのではないかと思う。

いくつかの不思議な現象を目の当たりにした今

回の青春夜行。参加者たちは賢治さんのおかげで100年ぶりによみがえった作品情景を味わうことができたのだ。

## 嘉藤治から賢治、そしてシュタイナーへ

NPO法人ポラーノの広場 瀬川 正子

嘉藤治さんとの出会いは、1999年、ビューガーデンのオープンに向けて突貫準備中でした。ガーデンの予定地は嘉藤治さんが開拓した場所だったので。

私は初期に賢治さんを世に出す努力をした人物が、開拓農民として生きた藤原嘉藤治だったということを知り驚きました。それから少しずつ調査や顕彰活動を始め、現在に至っています。

「雨にも負けず」位しか知らない私でしたが、嘉藤治さんを通して賢治さんにも触れ、そのご縁から「東京賢治シュタイナー学校」の鳥山敏子さんに会うことになっていったのです。

鳥山敏子さんは30年ほど小学校教師をされていましたが、社会や学校の中で悲鳴をあげる青少年や子供たちが何とかして希望を持てるようにと、早期退職を決意して「賢治の学校」を立ち上げたのです。“全国に「賢治の学校」を”と東奔西走、超人的に執筆や講演、ワークショップをこなし、学校運営を軌道に乗せました。2013年9月、鳥山先生はお忙しい中をビューガーデンでのご講演を引き受けて下さいました。その時先生は「私は子供の時から宮沢賢治のようになりたいと思って今迄生きてきました。でももう賢治の倍ぐらい生きてしまったわ」などと冗談のように話され、「大人も子どももほんとうの自分をしっかり生きられる、そういう社会にならなければ…」とも話されました。参加者一同大いに感銘を深めた講演でしたが、その16日後、鳥山先生は急逝されました。ビューガーデンが最後の講演地になってしまったのです。

「東京賢治シュタイナー学校」と交流を進める中でシュタイナー教育に出会いました。賢治より35歳年上のオーストリア生まれの哲学者、ゲーテ研究者、ルドルフ・シュタイナーが提唱した人智学(アントロポゾフィー)に基づく教育です。

シュタイナー教育を実践する学校は世界的に1100校ですが日本ではまだ10校ほどで、多くが法

人化できずに親や教師の熱意で運営されています。シュタイナー教育は単なる教育の方法論などではなく、高い人間性と深い洞察力をたゆまず求めて生きる大人があってこそ子どもにしっかり向き合えるという、大人側の姿勢を一番に問うているのです。本来子どもがもっている学びたい意欲

を、心からの発露として受け止め導いていくという役割が求められているのです。その意味で、大人も子どももしがらみや抑圧からの解放へのほんとうの教育なのだ、そして、やっぱり宮沢賢治なのだ、最近しみじみ感じております。

# 来館者の声

記帳ノートから

No.360~361

**こ** の日のために「雨ニモマケズ」を暗記してきました。「雨ニモマケズ手帳」が見れてとってもうれしかったです。本も10さつ以上読んでいたのでこれからも、もっと読みたくなりました。

**「雨**ニモマケズ」が大好きな孫達と一緒に見学しに参りました。小説家だけじゃなく、多面的な人間性にびっくりしながら、小学校2年3年の孫たちは喜んでおりました。とても勉強になり、楽しいひとときを、ありがとうございました。

**栃** 木県から夫婦で来ました。現在でも宮沢賢治の作品が愛されているのは、作品が素晴らしいことももちろんですが、賢治の真面目で素朴な人柄や生き方が支持されている理由の一つなのかもと記念館の展示を見て感じました。また伺いたいです。

**空** 港めぐりをして、花巻空港に寄ってからココにきました。「雨ニモマケズ・・・」小学校の時に習って以来でなつかしかったです。震災が起きて6年たって、どんどん風化してきてなんだかすごく残念です。復興進んでますか？東京に帰りがてら、海沿いを通って帰ります。

そうそう、SL銀河の製作にたずさわりました。客車を作るの相当大変でした。車内だいぶこっててすごくイイと思います。たくさんの人に乗ってもらえたらと思います。

**母** が宮沢賢治のファンで、私は小さいころから賢治の作品を読んでいました。ずっと前から来たいと思っていた花巻に来られて本

当にうれしいです。まだ読んだことのない作品も多いので、これからも賢治さんの本を読んでいきたいと思いました。

**「雨**ニモマケズ」の直筆の手帳には感動しました。生誕120周年おめでとうございます。

**出** 張で岩手にはじめてきました。花巻は憧れの地でした。今日お誕生日でびっくりです。

風の又三郎と銀河鉄道の夜で育ちました。永訣の朝や慟哭の叫びがしづかによみがえって心にずしりとひびきます。

**今** 日は賢治先生の誕生日。生誕120年との事ですが、私も本日誕生日で50歳となり、賢治先生と自分の誕生を祝うつもりで来館しました。賢治先生の人生は自分にとって参考になったり、感動したり、折々においてバイブルとなっています。子供達に雨ニモマケズの手帳を見せられたこともよい思い出になりました。とてもうれしい一日となりました。

**小** 6の娘がこの夏「宮沢賢治先生」について自由研究をしました。私自身、ここに来るのも何年？何十年ぶりですが、改めて花巻がみなさんに愛されていること、賢治先生が愛されていることをこのノートから知ることができ感動しています。賢治先生、おたんじょうびおめでとうございます。これからもたくさんのファンの方々にすてきな思い出を…。

**念** 願の賢治さんのふるさとに一人旅でやってきました。台風が心配でしたが、まるで賢治さんが歓迎してくれているかのような晴れ空。2代のころからずっと岩手に来たいと思っていて、10年越しに夢が叶ってうれしいです。社会人になって、世の中で生きていく大変さや人づきあいの苦しさを知り、何より賢治さん自身の魅力にひかれました。これから先もずっと作品を探求していきたいと思っています。優しさって強さと似ていますよね、そのことを彼から学びました。

## ■賢治の世界ワークショップ

## 秋田街道を訪ねて

平成29年9月19日(火)に岩手大学内にある農業教育資料館と同人誌「アザリア」100周年を記念して、賢治が仲間と歩いた秋田街道を訪ねました。農業資料館には盛岡高等農林学校に在籍していたころの資料等が展示されています。また、賢治が高等農林3年の夏、文学愛好の仲間と同人誌「アザリア」を発刊し、創刊後初となる会合の後、感情が高まった賢治が雫石の春木場まで仲間3人と深夜の秋田街道（現国道46号線）を歩いた道のをバスで辿りながら御明神公民館から春木場駅までの、わずか500mでしたが秋田街道を実際に歩きました。



13名の参加者からは、「旧盛岡高等農林学校を訪ね、若き学生時代の賢治を知ることができた。アザリアがどうして注目を浴びるようになったのかのお話が大変興味深かった。」「賢治さんが歩いた秋田街道追体験ができてよかったです。真夜中にどんな会話をしながら歩いたんでしょう…。」「個人ではなかなか訪ねることができないのでこのような企画があるとうれしい。賢治の学生時代の生活や活動、交遊を具体的に知ることができた。」という感想をいただきました。

## ■賢治の世界ワークショップ

## 胡四王山の散策

平成29年10月22日(日)に宮沢賢治記念館がある胡四王山を散策しました。山頂には胡四王神社があり、お正月には裸祭りのお参りのあるところで、賢治さんの願った「経埋ムベキ」山の一つでもあります。当日は、森林インストラクターの高橋修氏を講師に、胡四王山の周辺を散策しながら草花や樹木の説明をしていただきながら「ほう」「ああ」と感心したり驚いたりしながら約1時間余り山道を歩きました。台風21号の接近のため、小雨の中の散策となりましたが、参加した7名の皆様から「初めてのコースを散策したので、すべてが新鮮でした。」「散策しているだけでは何も気づかなかったことが、こんなにもたくさんの木の実、樹木の見る目を開かされたことに深く感謝いたします。」「雨にもかかわらず歩けたので満足でした。」「たかのつめ、がなづみ等、知りました。」という感想をいただきました。



## 今後の開催事業のお知らせ

### 賢治と樹木

#### —童話「虔十公園林」—展パートⅡ

宮沢賢治作品には、松、柳、杉、栗、はんのきなど、多くの樹木をみることができます。

当館では平成29年10月より「木を植える」ことをテーマとした童話「虔十公園林」を中心にとりあげ、残された自筆原稿（複製）を通じて、賢治における樹木の世界を紹介しています。この展示の一部を入替え、これまでの展示の第二弾として引き続き作品の魅力に迫る展示を行います。なお、修復が完了した童話「虔十公園林」の直筆原稿の公開も期間を限定して行いますのでお楽しみに。

会期：4月28日(土)～7月22日(日)

※直筆原稿の公開は4月28日(土)～5月6日(日)まで（9日間）。

4月27日(金)、5月7日(月)は資料入替のため特別展示室を閉室します。

### 童話「セロ弾きのゴーシュ」展

童話「セロ弾きのゴーシュ」は、絵本やアニメーションといった原作を忠実に再現したのもも多く、賢治の作品の中でも幅広く親しまれている作品の一つです。また賢治自身もチェロを弾いていたことから、その経験が作品の創作に影響しているであろうことも魅力の一つといえます。

この特別展では愛用品のチェロをはじめ、童話「セロ弾きのゴーシュ」の直筆草稿、賢治がセロの練習のために使用した直筆の学習ノートも公開を予定しています。

会期：7月28日(土)～10月14日(日)

※直筆資料の公開期間

- ① 7月28日(土)～8月5日(日)  
童話「セロ弾きのゴーシュ」直筆稿  
第1～11葉
- ② 8月25日(土)～9月2日(日)  
童話「セロ弾きのゴーシュ」直筆稿  
第12～22葉
- ③ 9月15日(土)～9月23日(日)  
童話「セロ弾きのゴーシュ」直筆稿

第23～32葉

セロ練習ノート

☆愛用のチェロ、妹トシのヴァイオリンは会期中、常時公開。

8月6日(月)、8月24日(金)、9月3日(月)、9月14日(金)、9月24日(月)は資料入替のため特別展示室を閉室します。

### 童話「雪渡り」展

童話「雪渡り」は雑誌「愛国婦人」（大正10年12月、大正11年1月）で発表されたもので、生前の賢治が唯一原稿料をもらった作品としても知られています。直筆草稿は残念ながら現存しませんが、雑誌掲載したものに賢治自身が加筆、訂正を行った「自筆手入れ稿」というものが残されており、その「手入れ」の様子から賢治の表現・発想力の豊かさを垣間見ることでもあります。

賢治が思い描いた冬のイーハトーブの世界観を楽しんでいただければと思います。

会期：10月1日(日)～平成31年3月31日(土)

※直筆稿の公開は10月20日(土)～10月28日(日)まで（9日間）

10月29日(月)は資料入替のため特別展示室を閉室。

### \* 編集後記 \*

平成29年度は、宮沢賢治生誕121周年にあたり当館では特別展として童話「やまなし」展、文芸同人誌「アザリア」100周年記念展、賢治と樹木—童話「虔十公園林」—展パートⅠを開催し、県内外からたくさんの来館者をお迎えいたしました。

また、花巻市内の児童生徒を対象に、県内外から賢治さんについて造詣の深い講師の皆様においでいただき「賢治の世界」セミナーを17校で開催し、講話や朗読、劇や生演奏を通して賢治さんの作品や生き方に触れる機会を設け好評を頂いております。

平成30年度も、さらに賢治さんの魅力を発信し、多くの皆様のご来館をお待ちしております。